小学５年生における，実践的に英語を表現するための授業改善
～国立台北教育大学附属小学校との台湾交流を通して～

鹿屋市立鹿屋小学校　教諭　萩原　美里

目　　次

１　研究主題・・1
２　はじめに・・1
３　研究主題設定の理由・・2
(1)　小学校学習指導要領から
(2)　児童の実態から
４　研究の目標及び研究仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
５　研究仮説を検証するために取り組むべき内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
６　研究の実際・・・4
(1)　Big Goal, My Goal の設定
(2)　Rubric の作成・共有
(3)　ICT や見方・考え方カードの効果的な活用
(4)　Trial and Error の工夫
(5)　台湾の児童との交流機会の確保
７　研究の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
８　おわりに・・9

〔引用・参考文献〕

・『小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編』　文部科学省　平成 29 年
・『教育課程特例校【英語】鹿屋市小学校の実施状況について』
http://www.city.kanoya.lg.jp/documents/4945/zissizyoukyou.pdf
鹿屋市教育委員会　令和４年
・『自らの力で豊かな未来を切り開く子供の育成～子供が自己調整する学びのデザイン～』
鹿児島県総合教育センター研究提携校　鹿屋市立鹿屋小学校　令和６年

１　研究主題

小学５年生における，実践的に英語を表現するための授業改善
～国立台北教育大学附属小学校との台湾交流を通して～

２　はじめに

鹿屋小学校は，文部科学省教育課程特例校の指定を受け，小学１～６年生の全学年において英語教育に取り組んでいる。教育課程特例校とは，各学校における児童の心身の発達の段階の特性及び学校や地域の実態を考慮し，教師の創意工夫を加えて，教育課程を編成できる学校である。教育課程の編成においては，教師が法令や学習指導要領の内容を十分理解するだけに留まらず，創意工夫を加えて，学校の特色を生かした教育課程を編成することが重要である。また，令和４年度から台湾の国立台北教育大学附属小学校と姉妹校となり，令和５年度より英語を実践的に使って海外の児童と交流する機会ができた。台湾も日本と同じく第２言語として英語を学ぶ国である。互いに母国語ではコミュニケーションが難しいという状況の中で，児童が主体的に考えながら交流し合う環境が整えられてきている。

そこで，昨年度に引き続き，本校で行われている英語教育を今一度見つめ直し，小学１年生から着実に積み上げてきた英語の知識・技能を高学年として実践的に使用していく方法を見いだし，姉妹校である国立台北教育大学附属小学校との交流の中で児童のさらなる英語力向上に願いを込めて，学校や児童の実態に配慮しながら，研究に取り組んできた。「小学５年生における，実践的に英語を表現するための授業改善」を自分なりの創意工夫の１つとして論ずる。

３　研究主題設定の理由

(1)　小学校学習指導要領から

平成 29 年度に告示され，平成 31 年度から現行の学習指導要領が完全実施されている。その中で新たに小学３，４年生に「外国語活動」，小学５，６年生に「外国語科」の名称で英語教育が盛り込まれた。

＜外国語活動の目標＞

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

＜外国語科の目標＞

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

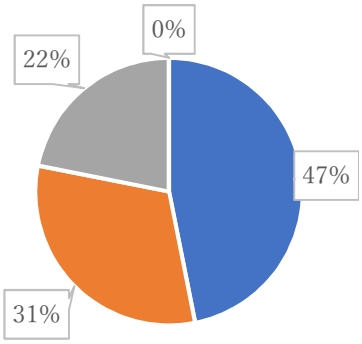
世界のグローバル化が急速に進展する中で，英語によるコミュニケーション能力は，これまでのように一部の業種や職種だけでなく，生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され，その能力の向上が課題となっている。小学校の英語教育では，英語でのコミュニケーションを図る素地や基礎を培う必要があり，英語嫌いをつくらず，楽しく英語にふれあうことができる環境の整地が重要だと考えた。そこで，全ての児童が英語を使うことに興味・関心をもつことができる工夫が重要であると考える。

(2)　児童の実態から

実態調査の結果を以下の資料１に示す。問１より，本学級のほとんどの児童が英語の学習に好意的であることが分かる。一方で「英語が難しく分からない」「話すことが苦手」という理由から英語が苦手と考える児童も一定数いることに配慮しながら授業を展開する。また問２より，台湾の児童との交流に好意的な児童が多いことが分かる。しかし，問３の「英語が伝わって嬉しいと感じたことはどのくらいありますか。」に対し，「とてもある」と答えた児童が，思っていたよりも少ないことから，単元の目標に工夫が必要である。日本語が通じる人との英語での交流を行うことが多く，英語を使うことの必然性を感じることができていない児童が多いためだと考える。また，台湾の児童の英語力が本学級児童と比べて非常に高く，英語でのコミュニケーションに難しさを感じていることも要因の１つだと考える。そこで，問４にあるととおり，児童が安心して円滑に交流を図るため，「複数名で取り組む」「スライドなどの準備をしておく」等，前もって準備することが大切だと考えた。

資料１：児童の実態（対象者：児童 32 名　実施日：令和６年７月 16 日　質問紙法）

１　英語の学習は好きですか。また，それはなぜですか。



とても好き 47%

楽しいから。（３名）
得意だから。（２名）
台湾の人に会えるから。
JTE や ALT が来るから。
たくさんの英語を知れるから。
英語を話すのが好きだから。等

好き 31%

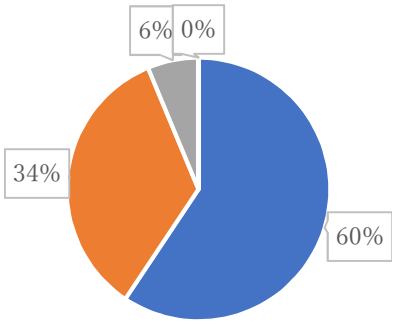
難しいけど楽しいから。（２名）
調べ学習が好きだから。
発音が上手くいったら嬉しい。
発表が楽しいから。等

あまり好きではない 22%

英語が難しいから。（３名）
分からないから。（２名）
話すことが苦手だから。
言い方や意味が分からない。

全然好きではない０％

２　台湾の友達と交流することはワクワクしますか。



とてもワクワクする 60%

外国の人と話せるから。（３名）
友達ができるから。（３名）
交流が楽しいから。等

ワクワクする 34%

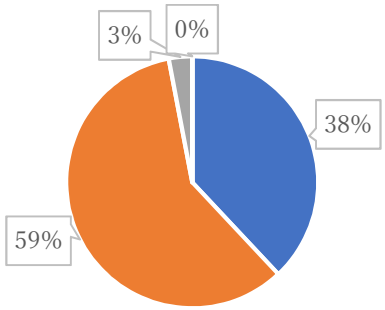
人と話せることが好き。
不思議な気持ちになるから。
友達と話せるから。等

あまりワクワクしない 6%

英語が分からないから。（２名）

全然ワクワクしない０％

３　英語が伝わって嬉しいと感じたことはどのくらいありますか。



とてもある 38%

台湾の友達と英語で話せた時に感じる。（２名）
海外に行ったとき役立ちそう。

少しある 59%

仲が良くなったときに感じる。
台湾の子は，外国語を話せるから。
あまり外国の人と話すことがないから。等

あまりない３％

分からないから。

全然ない０％

４　台湾の友達と交流するとき，どんな方法を使うとよく伝わると思いますか。（複数選択）	
・スライドを作って見せながら話す。（24 名） ・ビデオで動画を送って伝える。（14 名） ・イラストをつけて(絵を描いて)話す。（12 名） ・一人で伝える。（４名）	・複数人で一緒に伝える。（21 名） ・クイズ形式で伝える。（14 名） ・オンラインで話す。（11 名）

４　研究の目標及び研究仮説

上記の実態から，自分の思いや考えを伝えるためは，自分に合った表現方法を選択し，実践的に相手に英語を伝えることが必要と感じた。そのためには，令和４年度から鹿屋小学校と姉妹校となった国立台北教育大学附属小学校とのオンライン交流の機会を効果的に使うことが有効だと考えた。育成を目指す具体的な児童の姿は以下のとおりである。

○　自分の抱える課題に対する My Goal を設定し，Trial and Error を繰り返しながら，自己調整しながら粘り強く活動に取り組む姿。

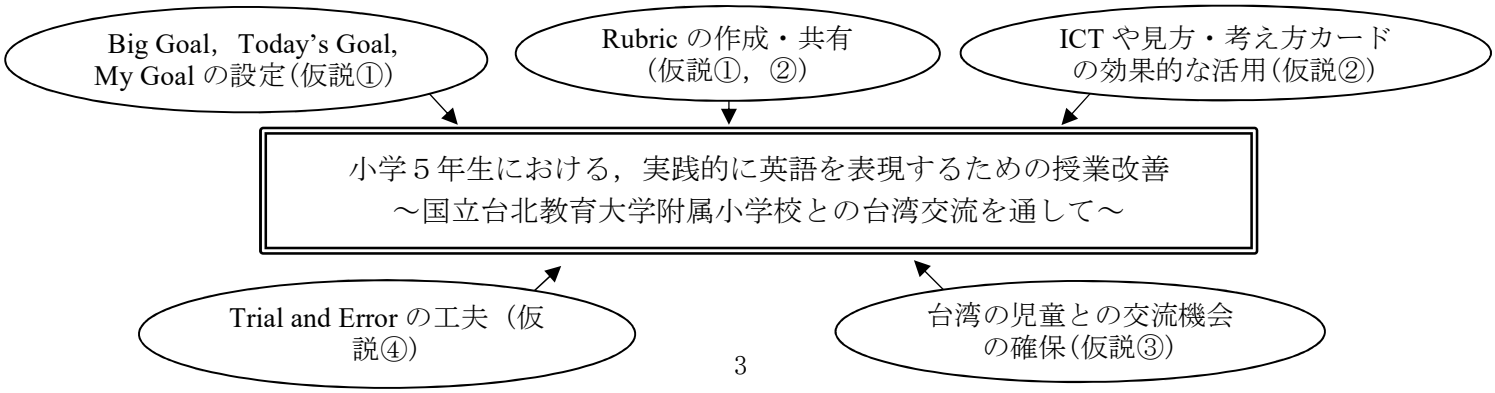
○　相手（台湾の児童）に対する思いや自分の考えを伝えたいという思いを，自分に適した方法で表現し，主体的に相手に伝える姿。

○　台湾の児童とのコミュニケーションの中で「英語が伝わった」と英語が伝わる喜びを感じ，英語への意欲を更に伸ばす姿。

上記の児童の姿を達成するために，以下の仮説を立てて実践する。

仮説①	各単元で Big Goal（単元を貫く到達目標）を設定し，Rubric（単元の評価規準）を教師と児童で共有することで，自分の課題をより明確にしながら，My Goal を設定でき，見通しをもって粘り強く自己調整学習に取り組むことができるのではないか。
仮説②	ICT や English Monsters（考え方）, Communication Points（見方）を活用することで，相手意識をもって英語を練習したり，児童一人一人に合った方法を自分で選択したりしながら，主体的に英語学習に取り組むことができるのではないか。
仮説③	単元の終末で成果を発表する時間として台湾の児童にオンラインで発表する機会を設けることで，英語を伝える楽しさ，英語が伝わる喜びを感じることができるのではないか。
仮説④	Trial and Error を進める中で，児童がどのような思考でどのような活動をしているのか可視化することによって，教師が適切な関わり方をすることができるのではないか。

５　研究仮説を検証するために取り組むべき内容



６　研究の実際

(1)　Big Goal（単元を貫く到達目標），Today‘s Goal（本時の目標），My Goal（本時の自分の目標）の設定（仮説①）

Big Goal を設定する際に，「何のために，誰に，何を伝えるのか」という目的・場面・状況等を意識するよう児童に伝えてきた。また，単元で使用する英語表現や，児童の実態，ALT の来校日等を踏まえて，効果的に台湾の児童との交流を取り入れてきた。ここでは，台湾の児童と行った動画の交流や，オンライン交流の実践を２つ（Unit4, Unit7）を紹介する。

単元名　NEW HORIZON Elementary 5 English Course Unit4 Who is this?	単元名　NEW HORIZON Elementary 5 English Course Unit7 Welcome to Japan!
本単元では，「台湾の児童に鹿屋のことをオリジナルゆるキャラで伝える」という Big Goal を児童と設定した。１学期に学習してきた自己紹介や”can”の表現を使い，鹿屋のオリジナルキャラを紹介する中で，鹿屋の自慢できるところを台湾の友達に伝えることを目的として展開した。同時に，台湾で活躍するゆるキャラを知ることにより，台湾の文化にも着目し，日本と台湾の文化の違い，同じところに意識しながら，動画での発表を行った。	本単元では台湾の児童から「来年度，鹿屋に行く機会が得られそうだけど，鹿屋に何があるのか知らない」というビデオレターをもらい，「鹿屋の魅力が伝わるおすすめの場所を紹介する」という Big Goal を児童と設定した。これまで学習してきた英語表現や，Unit4 の単元で学習した台湾の文化を活用し，鹿屋の魅力として何を伝えるべきか相手の文化や背景に意識しながら，オンラインでの発表を行った。

ア　Big Goal（単元を貫く到達目標）設定の工夫

Big Goal の設定を各単元で行うことによって，見通しをもちながら英語学習に取り組むことができると考えた。Big Goal を設定する第１時では，台湾の児童からのビデオレターから，解決すべき課題を見つけ，Big Goal につなげた。右の動画では，「鹿屋でできることが分からない」という台湾児童の動画から，「鹿屋の魅力が伝わるように詳しく伝えたい！」という意欲を高めることができた。

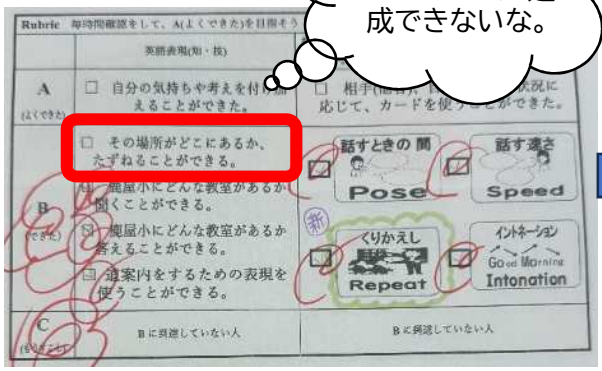
鹿屋で何ができるのか分からないなあ。

Big Goal
台湾の友だちに鹿屋に行きたいと思ってもらえるように，鹿屋の魅力ある場所をくわしく伝えよう。

イ　Today‘s　Goal（本時の目標）設定の工夫

毎時間，Big Goal を達成するために必要な活動を導入時に確認し，クラス全員で Today’s Goal を設定した。主に，Rubric の「知識・技能」の部分で未習の内容から Today’s Goal を立てるようにすることで，単元計画から大きく外れないように，でも児童の言葉から設定することができた。

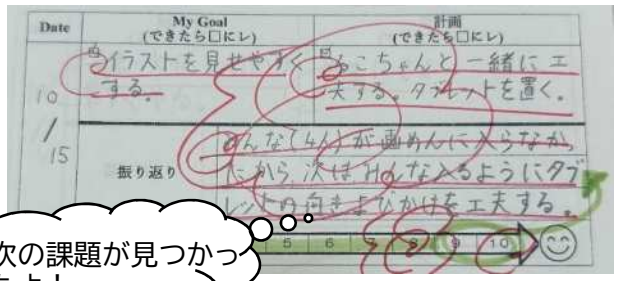
この表現がないと，Big Goal をまだ達成できないな。



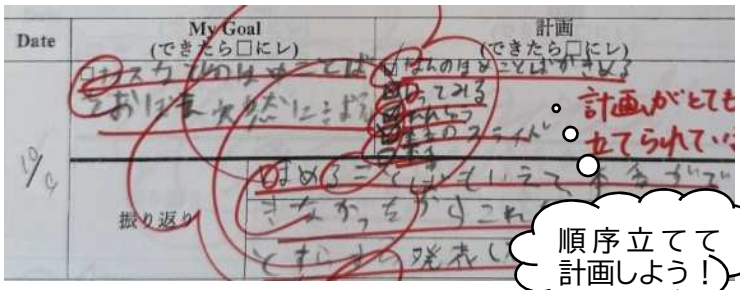
Today’s Goal
道案内をするための場所をたずねる英語を言えるようになろう！

ウ　My Goal（本時の自分の目標）設定の工夫

鹿屋小の児童が台湾の児童に伝えたい思いや考えは多種多様で，自分の課題や取り組みたいことも様々である。授業の導入時“Try1（復習）”として，前時までの学びを確認し，その課題から My Goal を設定することで，本時の学習に見通しをもって，主体的に取り組むことができるようにした。



次の課題が見つかったよ！



計画がとても立てられている

順序立てて計画しよう！

(2)　Rubric の作成・共有（仮説①，②）

児童と単元ごとのゴールを共有し，クラス全員が A 評価を目指すために，各単元で右のような Rubric を教師や JTE で設定した。Rubric の左側は主に知識・技能に当たる「英語表現」を，右側は主に思考力・判断力・表現力等と主体的に学習に取り組む態度に当たる「相手を考えた発表になっているか」，「伝える工夫」を記した。

(3)　ICT や見方・考え方カードの効果的な活用（仮説②）

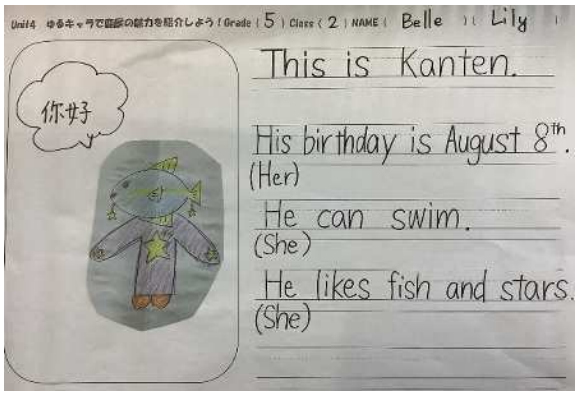
単元を通して自分の伝えたい思いや考えを英語にするとき，どのように調べ，どのように発表に組み込んでいくのか，個別最適な活動を進める中で，教師の児童への関わり方が難しいことがあった。そこで，ICT や鹿屋小学校で研究を進めている見方・考え方カードを活用することにした。

ア　ICT の効果的な活用

あらかじめ児童が伝えたいと考えている内容の動画を，JTE，HRT の音声とともにタブレットのロイロノートの資料箱に保存しておくことで，児童が必要な時に聞きながら学習することができるようにした。また，JTE と HRT で撮影した各単元の Goal Model 動画を保存したり，既習事項の音声データを単元ごとに保存したり，教室に掲示したりすることで，こちらもいつでも復習したり確認したりできるようにした。

自由に見ることができる
Goal Model（お手本動画）

Unit4：発表原稿用の Goal Model

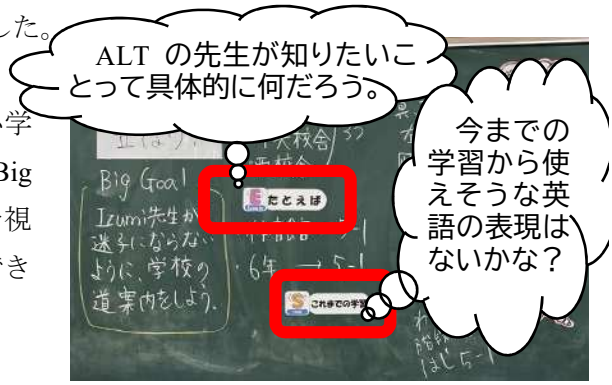


イ　Communication Points（見方カード）の効果的な活用

⑵の Rubric の作成・共有で記したように，単元ごとの Rubric の「相手を考えた発表になっているか」，「伝える工夫」の欄に Communication Points のカードを 4 つずつ提示している。特に単元で気を付けて使ってほしいカードを Rubric に示すことによって，各単元で系統的に，そして確実に英語の見方を獲得することができるようにした。

ウ　English Monsters（考え方カード）の効果的な活用

英語の学習を自己調整しながら進めるために，鹿屋小学校で研究している English Monsters カードを使用した。Big Goal や Today's Goal を達成するために英語の考え方を視覚的に表し，クラス全体で共有することで全員が達成できるようにした。



⑷　Trial and Error の工夫（仮説④）

教えられたことを教えられたように使うだけの英語では，ALT との会話や台湾の児童とのオンライン交流の時に即興的な英語を使用することができない。そのため，児童の課題に対して、既習済みの英語を使ったり，ジェスチャーやイラストを使って伝えたり児童の力だけでトライする時間を必ずつくるようにした。そうすることで日本語が通じない相手になんとかして即興的に伝えようとする力が培われると考えた。ただ，児童が今どのような考えで，どのような方法や手段で学んでいるのか個別に理解することが難しく，適切な支援・指導が難しいと感じていたため，右のような「Try カード」を作成した。児童がそれぞれで，「今何に，どんな方法で取り組んでいるのか」をこのカードで示すことで，支援を必要としている子を可視化し，教師が児童に対し適度な支援を行うことができるようになった。

【Try カード例】

⑸　台湾の児童との交流機会の確保（仮説③）

英語を使う必然性を児童が感じることができるように，単元の中盤や最後に台湾の児童に発表する機会を取り入れるようにした。単元の中で学んできたことを発表し，相手に伝わるという経験が児童の中で達成感となり，英語を更に学びたいという意欲につながると考えた。以下は，初めて台湾とのオンライン交流をする様子である。タブレットの画面に全員の顔が写るようにカメラを向けたり，イヤホンに近づけて話したりすることが大切だと理解した。この学びを生かして，オンライン交流の本番を迎えることができた。

発表する人の顔が写るようにしないとね！

本番に向けてもっと練習したいな！

台湾の友達にちゃんと声が届いたよ！

７　研究の成果と今後の課題

資料２（対象者：児童 32 名　実施日：令和６年 12 月 13 日　質問紙法）

１　英語の学習は好きですか。

調査項目	７月（%）	12 月（%）	変化（±）
とても好き	46．８％	62．５％	＋15．７％
好き	31．３％	25．０％	－６．３％
あまり好きではない	21．９％	９．４％	－12．５％
全然好きではない	０．０％	０．０％	±０．０％

２　台湾の友だちと交流することはワクワクしますか。

調査項目	７月（%）	12 月（%）	変化（±）
とてもワクワクする	59．３％	56．３％	－３．０％
ワクワクする	34．４％	34．４％	±０．０％
あまりワクワクしない	６．３％	６．３％	±０．０％
全然ワクワクしない	０．０％	３．１％	＋３．１％

３　英語が伝わって嬉しいと感じたことはどのくらいありますか。

調査項目	７月（%）	12 月（%）	変化（±）
とてもある	59．３％	65．６％	＋６．３％
少しある	37．５％	28．１％	－９．４％
あまりない	３．１％	６．３％	＋３．２％
全然ない	０．０％	０．０％	±０．０％

４　台湾の友だちと交流するときに気を付けていることは何ですか。

- ジェスチャーをつけて話す。(６名)
- 声が聞こえやすいように話す。(３名)
- できるだけ英語を使う。
- 落ち着いてゆっくり話す。
- 英語をしっかり覚える。(５名)
- 英語の発音を丁寧に。(３名)
- 相手に失礼がないように話す。
- 仲良くするために笑顔で話す。

仮説に基づいて行った実践の成果と課題について，資料２に提示するアンケートや児童の活動の記録から分かる児童の変容を基に以下に述べる。

(1)　仮説①について

仮説①	各単元で Big Goal（単元を貫く到達目標）を設定し，Rubric（単元の評価規準）を教師と児童で共有することで，自分の課題をより明確にしながら，My Goal を設定でき，見通しをもって粘り強く自己調整学習に取り組むことができるのではないか。

資料２問１より，英語の学習が好きと答えた児童の数が大幅に増えたことが分かる。理由の中で，「台湾の人と交流ができるから」，「自分の言いたい英語を覚えられるから」という意見が多かった。単元のゴールを初めに明確に示し，台湾の児童との交流を伝えることで「英語が楽しい」というポジティブな気持ちを育むことができたと考える。また，My Goal を設定し，自己調整をしながら学習を進めることで，個々にあった学習ができ，これもまた，英語への好意につながったと考える。英語への好意をもつ児童が増えたことによって，学習中の発表する児童が増えたり，自分の意見をグループ

メンバーに述べたりと，意欲的に取り組む児童が増えることにつながったと考える。児童一人一人が，確かな言語意識をもって主体的に学びを進めることになり，英語の学力と達成感を積み重ねられた結果である。

(2) 仮説②について

仮説②	ICT，English Monsters（考え方）, Communication Points（見方）の活用によって，相手意識をもって英語を練習したり，児童一人一人に合った方法を自分で選択したりしながら，主体的に英語学習ができるのではないか。

ICT や English Monsters，Communication Points を使用し視覚的な情報を与えることで，英語活動への意欲や興味・関心の高まりを授業の中で強く感じられた。特にロイロノートの資料箱に学習の足跡を蓄積し続けたり，各単元の Goal Model を保存したりすることで，児童が学習に困った時にヒントとして自由に資料を確認することができた。自分の学びたい内容を自分の学びたい方法で学ぶことができ，個別最適な学習を進めることができたと考える。この結果が資料２問１の英語好きの増加にもつながったと考える。アイテムを与えたことで，児童がスモールステップで学習を進め，自らの成長を感じとることができた。

(3) 仮説③について

仮説③	単元の終末で成果を発表する時間として台湾の児童にオンラインで発表する機会を設けることで，英語を伝える楽しさ，英語が伝わる喜びを感じることができるのではないか。

資料２問２から，台湾の児童との交流にワクワクすると感じている児童が若干名減少してしまった。理由としては，「たくさん交流できて嬉しい」，「台湾の友だちができた」と答える児童が多い中，「英語が話せず，伝わらなかった」という失敗の体験をしてしまった子もいたことが原因であろう。そもそも発話が苦手な児童もいるため，英語での会話にかなりのストレスを感じてしまったのかもしれない。また，資料２問３からも若干名，英語が伝わって嬉しいと感じた児童の割合が減少してしまっていることが分かる。これも，台湾児童との交流が難しいと感じて，伝わらなかったという経験からだと考える。今後は，英語を伝えたいと児童が必然性を感じることができる目的・場面・状況等を設定しつつ，児童全員，英語が伝わったと感じることができるように準備を進めていく必要性があると考える。

(4) 仮説④について

仮説④	Trial and Error を進める中で，児童がどのような思考でどのような活動をしているのか可視化することによって，教師が適切な関わり方をすることができるのではないか。

Trial and Error では，個別最適な教師から児童への見届けの難しさを感じていたが，ペアごとに作って使用した「Try カード」によって，今児童が何を達成したいと考え，どのような手段を現在とっているか教員側がはっきりと視覚的に理解できるようになった。これにより，各個人に最適な指導・支援を効率よく行うことができるようになり，より自己調整を伴った学習につながったと考える。ただ，なかなか学習すべき内容を自力で考えることが難しかったり，見通しをもちながら練習をしていくことに困難さを感じたりする児童もいるため，学習内容を選択できるようにしたり，教師による支援や協力的な学びを工夫したりすることが状況によっては必要であることが明らかになった。

８　おわりに

今回，外国語の授業改善を通して，児童の成長や変容を感じることができた。また，今年度は 10 月 18 日(金)に「リナシティかのや」で「九州地区英語教育研究大会鹿児島大会」の壇上授業を行い，実際に姉妹校である国立台北教育大学附属小学校とオンライン交流を行った。５年２組の児童は，会場に来ていた約 300 名の観客の前で授業を行ったことによって，英語への自信をかなり付けたように思う。台湾の児童とオンライン交流をする中で，タブレットのイラストをカメラに近づけて見せたり，コミュニケーションカードを見せながら話したり，なんとかして自分の思いを伝えたいという意欲が表れた交流会となった。お互いに英語でしかコミュニケーションがとれないという状況の中で，英語が伝わると，その分「伝わった！」という喜びも大きかっただろうと思う。一方で，台湾の児童相手に「英語が伝わらなかった」，「難しかった」と感じる児童もいて，難易度の部分で課題もあったため，授業改善を今後も続けて，より英語が楽しいと感じることができる授業づくり，台湾児童との交流を関連付けた，英語を使う目的，場面，状況を明確にした授業づくりに取り組みたい。

≪台湾児童との交流の様子≫

≪リナシティかのやでの壇上授業の様子≫